髙陵山　光明寺寺報　第４号

平成 29 年 10 月 1 日発行

発行　石狩市八幡町高岡 16-2　光明寺内

第 25 代専如門主伝灯奉告法要　**本山御影堂前**

『歎異抄』という書物に「親鸞は弟子一人ももたず候ふ」という一文があります。親鸞聖人はご自分を慕って集まって来る念仏者を、「御同朋、御同行」と呼び弟子とは申しませんでした。同朋というのは志を同じくする友、同行というのは行を同じくする友という事です。親鸞聖人は一心にお念仏を歓ぶ身に格差や区別など入り込む余地は無く私達を「同朋、同行」と呼んで下さっています。昨今隣国よりミサイルが飛来し政府より警報が発せられています。北海道を含む東日本の上空を通過しているようで先日の報道では東北地方に盛んに注意を呼び掛けていました。思わず「ああ、北海道でなくて良かった」と心で呟きました。しかし同時に「自己が良ければ他はどうでもよい」という利己心に溢れている自分に気付かされました。人は常に自己の都合により考えが様々に変化します。不完全なこの世の中で唯一不変の道標となるのがお念仏であり、そのお念仏を歓びとする人は皆仲間と迎えて下さった方が親鸞聖人です。お念仏を通し己への執着心を明らかにして下さる阿弥陀様のみ教えに共に出逢い歓びましょう。

本山団体参拝旅行

本願寺御門主御一家

右側のお二方が前門主ご夫妻
左端の新ご門主とご家族

本年3月 28 日から3泊4日の団体参拝旅行は4か寺合計で 38 名、光明寺からは 17 名が参加し歴史的な法要参拝のご縁を賜りました。

【初　日】

朝 5 時にお寺を出発し新千歳空港から空路関西へ、まずは一番の目的である本山の本願寺へ『第 25 代専如門主伝灯奉告法要』に参拝しました。退任された即如上人、継職された専如上人が同時に「阿弥陀堂」「ご影堂」両堂に御出勤され厳かに整えられた御堂で御法要が勤められました。その後「伝灯のつどい」が催され、新ご門主とお裏方（門主の妻）からお言葉を賜り長男の敬さま（写真の左から二人目）は手話でのご挨拶をされ、ご一家皆様が参拝者と同目線で交流を深められ大変親しみを感じるひと時でした。又、帰敬式が行われ当寺より6名の御門徒が受式、法名を拝受されとても尊いご縁になりました。夕食は京料理店「六盛」へ、信教寺様総代の榎本新一様より乾杯の御発声で開宴。上品な京料理は眼には栄養になったものの実際のお腹の方は今一つで、総代、住職、住職の次男の3人で祇園の焼鳥屋へ消えました。

【2日目】

まずは大谷本廟へ。大谷本廟は浄土真宗の開祖親鸞聖人の御遺骨が納骨されており、門徒は往生の後その大谷本廟へ分骨する事が慣わしとなっています。此度は元総代長の故小池勝慶様のお骨の一部の分納骨を行いました。当日は在阪の小池さんの御長女やご参加の皆さんと本廟で一緒にお参りのご縁を戴きました。その後、祇園円山で湯豆腐の昼食を戴き近くの八坂神社や浄土宗の本山知恩院を自由拝観。学業成就や武芸上達で有名な北野天満宮散策、上七軒歌舞会で芸妓さんが三味線等の音楽を奏で、色とりどりの鮮やかな衣裳の舞妓さんの演舞を観覧し、今回の旅行での目玉の一つである兵庫県の有馬温泉へ向かいました。夜には大宴会を開催し参加の皆さんより自己紹介を戴き、中にはお寺は違えども旧知の間柄の方もいたようで楽しい時間は過ぎてゆきました。二次会はホテル内のカラオケスナックに場所を移し老若男女問わず交流を深めました。

小池さんの御遺骨
を中央に

【3日目】

白鷺城の別名で有名な姫路城へ。城内の急こう配の階段を最上階の天守閣まで80歳越えながら登りきる方あり、途中で諦め引き返す人あり、自分の足と相談しながら見学、昼食を挟み本願寺神戸別院参拝を行いました。神戸別院はエキゾチックな町並みの中でもひときわ異彩を放ち、インド仏教様式の斬新なデザインは神戸の人々にモダン寺の呼称で親しまれています。その後、神戸南京中華街、ポートタワーを巡り神戸港から出航のディナークルーズに乗船しピアノの生演奏の中、バイキング料理の夕食を楽しみました。翌日で帰路に就く安堵感と寂しさを覚えながら、船上より煌びやかな神戸空港やライトアップされた明石海峡大橋等を眺めていました。実はこの日、住職は訳があり団体とは別行動をとっており、姫路城のくだりは同行の方より聞いた話です。住職のこの日の一番の思い出は、毎日豪勢で珍しい食事が続く中で神戸空港の蕎麦屋で食べたおろし蕎麦がとても懐かしく美味しかったことです。やはり、お馴染みが一番です。

【最終日】

神戸より大阪へ移動し笑いの殿堂、吉本興業のなんばグランド花月へ行きトミーズや桂文珍ら多くのタレントの漫才やコント、落語を楽しみました。昼は本場大阪のお好み焼き等を堪能し伊丹空港へ、懐かしく寒い北海道石狩へ帰還となりました。新千歳空港で解散式を行い、当寺総代長の藤岡暎市さんより御挨拶を賜り今回の旅行が終了致しました。

此度の団体参拝旅行にたり様々な調整等大変ご苦労頂いた新篠津浄楽寺住職、木村良麿師(左写真)**や、旅行が円滑に遂行されるよう奔走下さった添乗員の白川さん**(右下写真)**、行程企画の近畿日本ツーリスト他関係者の皆様に感謝を申し上げ、旅行報告の結びと致します。次回の本山参拝は5~7年後位の予定です。お寺の旅行とはいっても寺巡りばかりではなく、お読み頂いたように各地の名所旧跡を訪ねる楽しい旅行ですので、皆様には今から参加費を貯めて多数の御参加をお願い申し上げます。**(住職)

報恩講参拝のお誘い

黒田顕城師

本年も１０月２２、２３日の二日間にわたり親鸞聖人のご苦労を偲び感謝を申し上げる報恩講をお迎え致します。布教には秋の永代経でお馴染みの札幌市覚英寺の黒田顕城師に御出講戴きます。本願寺派寺院ではお盆が終わると一斉に報恩講が勤まります。各御寺院とも参拝者を募る為努力を惜しむ事なくコンサートや落語等の催しを企画する、お参りし易い日程や時間を工夫するなど試行錯誤を重ねていますが、なかなか思うようにいかないことが多いようです。お付き合い寺院から「熱心な御門徒が都合でお参りを休まれたときにその席が埋まらない」或いは昔の報恩講の賑わいを知る光明寺の御門徒からは「最近はお参りが少なくなった」との声が聞こえます。「夜は映画を見て、お寺に泊まる人の布団が本堂一杯に敷き詰められていた」時代もあったそうです。昔は日常の娯楽も少なくお寺に行く事は数少ない楽しみの一つだったのです。時を経て今「お寺」「仏教」に対する一般的なイメージは「死」にまつわる時以外は関係がない、必要性を感じない、お寺へ行く理由がない、というところではないでしょうか。「仏教」とは文字通り私が仏になる教えです。しかし、仏になるには死ななければなりません。その死をどのように迎えるか、その死を迎えるまでに与えられた命をどのように力強く生きるか、というテーマが「仏教」の一番の目的です。亡き人の成仏を願うのではなく、今、迷いの世に生きている私が仏様の導きに出会うことを阿弥陀様は願っています。人は道に迷うとき地図や案内図を頼りにします。今はカーナビゲーションというとても便利な機器もあります。私達は道に迷ったとき先ず目的地を探す人はいません。何に迷うのかといいますと、自分が今どこにいるのかに迷い、進むべき道に迷うのです。どんなカーナビにも一番目立つ場所に「現在地」というボタンがあり、案内図にも目立つように「現在地」と表示されています。迷いの世に生きる私にとって「南無阿弥陀仏」のお念仏こそがまさに現在地を明らかにし、進むべき方向を照らして下さる人生の案内図となるのです。「信心が無いから聞いても仕方がない」と言う方もいますが、ご信心は有る無しではなく阿弥陀様から戴くのです。私の命の縁が尽きたときにその向こうにはどんな世界があるのかを知ることは、生きている今しか出来ないからこそしっかりと聴かせて戴きましょう。亡きご先祖の命の相続のお陰で今、お寺参りの機会を与えられたことに感謝を申し上げ、報恩講にご参拝下さい。また、本年度より報恩講のご縁に門信徒物故者追悼法要を厳修致します。光明寺よりご案内が届いた皆様には特にご家族お揃いでお参りを賜りますようご案内を申し上げます。報恩講日程は別紙ご案内を参照下さい。

日帰り研修旅行

今年の研修旅行は22名参加で少々肌寒い6月24日に空知方面を巡りました。先ずは由仁町のユニガーデンへ、広大な敷地に咲き誇る色とりどりの花を観賞し、新篠津たっぷの湯へ移動し昼食と入浴でゆっくり過ごしました。道の駅も併設されていて入浴しない方も皆思い思いに過ごして戴きました。ただ3時間も同じ場所にいると時間を持て余し気味になり、おまけに雨天の為散歩もままならず温泉と道の駅を行ったり来たりしているうちにようやく時間になり岩見沢の本向寺様へ向かいました。本向寺住職と当寺住職は同年齢で京都の学生時代の同窓でもあり互いに気遣いの必要がない間柄です。約3年半前に当寺住職が入院した際に一番に駆け付けてくれたのが本向寺住職だったそうですが、私は当時意識不明の状態にありましたので自分自身の眼で確認しておらず、今回確かめたところ確かに間違いなく、改めてご迷惑をおかけしたことを痛感させられました。当日は御院内を隈なく拝観させて戴き、婦人会の皆様にもこの上ない御接待を賜り恐縮のうちにお寺を後にしました。最後に当別の浅野スマイルポークに立ち寄り買い物をし帰路につきました。因みに浅野スマイルポークは元総代長の岩本政一様のご親戚が養豚業を営んでおりその直営店ですが、国道 275 号線沿いにありますので皆様も是非お立ち寄りください。帰りのバス内では恒例の景品や余った飲料を賭けてのじゃんけん大会に盛り上がり、午後5時頃に皆無事にお寺に到着しました。皆様にはなるべく疲れを残さないよう立ち寄り場所は少なく、早めに戻れるよう企画致しますので、来年もご参加頂きますようお願い申し上げます。

盂蘭盆会法座と納骨堂感謝法要

本年8月は例年になく涼しく各戸へのお盆参りが大変楽なお盆でした。ただ、1日20軒程座る立つを繰り返すと膝と足首がガッタガタでおまけに多くの方に指摘されることですが住職の体重が年々増加の一途をたどり、情けないことに正座が長引くと足が痺れて立ち上がるのも一苦労になってきました。皆様から労いの言葉を戴きながら、1日の日程が終わりお寺へ戻ると早速シップ薬のお世話になっていました。そんなお盆も始まればちゃんと終わるもので、大詰めの8月16日に納骨堂と本堂でお盆のお参りを勤めました。此度は例年に増して40名程の方がお参りに来られました。住職として御法座に沢山のお参りがあることほど有難いことはなく、驚くやら嬉しいやら、共に正信偈のお参りの後地獄の様子を描いたビデオを観賞し、尊い時間を過ごしました。ビデオの内容はなかなかの迫力があり、地獄の恐ろしさに怯える方もいたようですが、少なくとも8月の16日にお寺参りに来る方は地獄になんぞ堕ちることはなさそうですが。法座後にはお参りの皆様に納骨堂に供えられたお供物や仏花をお下げし、清掃のお手伝いを戴きましたこと、紙面を借りて御礼を申し上げます。日が経つのは早いもので、お盆が終わるとやがて宗祖聖人報恩講が参りますので、皆様の御参詣を心よりお待ち申し上げます。

證誓寺仏教婦人会御一行様御来院

6月13日に光明寺の報恩講御法中でもある札幌市西区の證誓寺仏教婦人会の御一行様、総勢36名が当寺へ来院されました。本堂へご案内し、讃仏偈のお勤めの後、住職より光明寺の縁起や高岡の特徴などをご紹介させて戴きました。丁度高岡は時期的にクマ騒動で賑わっていた頃で、そのことをお話しすると声を上げて驚かれていましたが最近はクマ騒動も一段落したようで、まるで祭りの後のような寂しさを覚えます。その後、参拝の皆様へお土産に特産野菜を差し上げ、集合写真を撮影しお寺を後にされました。證誓寺御住職（左の写真、住職夫妻）は、11歳で往生された私の兄、正眼と同年齢ということもあって何かと相談相手になって頂いくことも多々あり、とても頼りにしている存在であります。数年前には光明寺からも日帰り研修旅行で證誓寺様へ参拝させて戴き、大変な歓待を賜りました。多少なりとも、その時の恩返しが出来たかと思いながらお見送りをしました。最後に、お手伝いを戴いた総代と仏教婦人会の皆様に厚く御礼を申し上げます。

それぞれの婦人会会長

見真大師降誕会法要

6 月 21 日、浄土真宗の開祖、親鸞聖人のお誕生を歓ぶ「降誕会法要」が、石狩真宗連合会の会員御寺院の皆様の御出勤のもと勤まりました。旧石狩町地区には浄土真宗のお寺が6か寺在ります。**光明寺**と同じ本願寺派（お西）の八幡町、**信教寺**様、真宗大谷派（お東）の親船、**能量寺**様、生振、**生振寺**様、花川南、**永泉寺**様、最後に真宗興正派は花川南、**了恵寺**様の6か寺です。西も東も興正派も浄土真宗と名がつけば一番大事な教えや読むお経に違いは全くありません（節回しが派によって変わります）。しかし作法や本堂のお飾りなど細かい部分に違いが認められます。御仏飯の盛り方や輪灯（天井から吊り下げられている行灯）の形、ろうそく立ての仕様等がその派によって様々な形があり、それぞれの宗派の意義がうかがわれます。派の別は有っても同じ親鸞聖人を開祖とする浄土真宗同士、連合会を組織し互いのお寺の法要に行き来しあうなど活発な活動が展開され、数年前には会員家族も募り京都に存在するそれぞれの本山参拝旅行も行われました。このように密な活動が行われている地域は余り見当たらず尊いご縁を戴いています。

お寺の法要、行事の報告

春季永代経法要

４月２４日、春の永代経法要が修行されました。ご布教には三笠の善行寺副住職、名和康成師（写真）にお越し戴き、笑いを交えながら分かり易く御法話を賜りました。お寺はご門徒の皆様の御懇念（金品の施し）によって支えられています。門信徒の心の拠り所ともなるお寺にお参りをするには、まずお堂が無ければなりません。でも、入れ物だけでは何の建物かわかりません。お堂内には御本尊である「阿弥陀如来」にお入り戴き、お飾りを整える為様々な仏具が揃い、僧侶が着用する衣や袈裟を与えられて寺院としての体裁が整い、初めてご門徒がお参りをする本堂となります。現在の光明寺本堂を拝見しましても立派な本堂としてその役割を果たして下さっています。それらは住職が全てこつこつと揃えたものでしょうか？何もない場所にお堂を建立し現在の光明寺に至るまでには、篤信門信徒の「永代に亘り光明寺からお経の声が途絶えることのないように」との切なる願いと熱意の結果が今の光明寺本堂の荘厳なるお姿であり、自分達のお寺を自分達の力で維持していくという決意に尊い姿勢が現れているといえるでしょう。

ところで、永代経の志納金はいつ、いくらくらい包んだらよいのか？という質問をよく伺いますが、時期については思い立った時に忘れないうちに、金額については施主の方の自由判断です。ただ一つヒントを言いますと、志納金は「財施」とも申します。いわゆる「財」を「施す＝ほどこす」というだけあり「ほどを越せば超すほど良い」とも聞こえます（冗談です）。信仰はある程度心身共にゆとりがあって出来ることですので無理のない範囲で、ご自身の生活を圧迫しないところでお考え戴き御上納下さいましたら有難く今後共お願い申し上げます。

本年秋の永代経法要は秩父別町常楽寺住職、山本徹淨師を布教使にお迎えし１１月１２日に修行致しますので、お誘い合わせお参り下さいますよう御案内を申し上げます。

後記　７月、時季外れの大変な暑さの中を親族、総代、前総代長の皆様のご臨席を賜り前住職と前々坊守のそれぞれ７回忌を勤めさせて戴きました。思い返すと父である前住職は当時の総代から「うちの住職は凡夫だ」という言葉を貰っていました。「凡夫」とは欲深い凡人の事で悟りの反対を意味します。皆様ご存知の通り前住職は誰とでも胸襟を開きお酒を片手に心ごと交流を深めていました。「凡夫」という言葉は坊さんがご門徒に法話で使う言葉であっても、ご門徒が坊さんを指して言うことは余りありません。しかし住職本人を前に「凡夫」と言えるのはお互い遠慮が必要無い間柄だったからでしょう。私も「凡夫」と呼ばれるよう頑張ってまいります。

文責＝住職です。